

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和4年11月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万5515トン、前年同月比93.9%、価格は1キログラム当たり229円、同106.7%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万8620トン、前年同月比96.0%、価格は1キログラム当たり216円、同105.9%となった。
- 1月の見通しについて、関東から北に強い寒波が入っており、九州まで及べば、野菜は出回り不足となり価格が上昇に転じると思われる。年末から年明けは平年より安めの展開と予想される。

(1) 気象概況

上旬は、北・東・西日本では、旬のはじめは低気圧や前線の影響で曇りや雨となった所があったが、西日本を中心に高気圧に覆われて晴れた日が多かった。このため、西日本日本海側では旬降水量はかなり少なく、旬間日照時間はかなり多かった。旬平均気温は、全国的に平年並だった。旬降水量は、北・東日本日本海側と北・東・西日本太平洋側で少なかった。旬間日照時間は、西日本日本海側でかなり多く、北・東日本日本海側と北・東・西日本太平洋側で多かった。一方、沖縄・奄美でかなり少なかった。

中旬は、北・東・西日本では、天気は短い周期で変わったが、本州付近は高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、旬間日照時間は北・西日本日本海側と北日本太平洋側でかなり多く、旬降水量は東・西日本日本海側で少なかった。旬平均気温は、寒気の影響が弱かったため、全国的に高く、北・東・西日本で高かった。旬降水量は、北日本日本海側と北・東・西日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、東日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった。

下旬は、北日本から西日本にかけての太平洋側と沖縄・奄美では、低気圧や前線の影響をたびたび受けたため、天気は短い周期で変わった。東・西日本太平洋側と沖縄・奄美では、旬のはじめと終わりを中心にまとまった雨となったため、旬降水量はかなり多かった。一方、寒気の影響が弱く、曇りや雨の日が少なかった北・東・西日本日本海側の旬間日照時間は多かった。寒気の影響が弱く、低気圧の前面で南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は全国的にかなり高く、旬平均気温平年差は、北日本+3.4度、東日本で+3.7度、西日本で+3.5度、沖縄・奄美で+2.1度となり、1946年の統計開始以降、11月下旬として北日本では1位タイ、東・西日本と沖縄・奄美では1位の高温となった。旬降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側で多かった。一方、東・西日本日本海側では平年並だった。旬間日照時間は、北・東日本太平洋側で少なかった。西日本太平洋側と沖縄・奄美では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図 1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本									日本海側 太平洋側
東日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側
西日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側

資料:気象庁「11月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

11月の東京都中央卸売市場における野菜の

入荷は、入荷量は11万5515トン、前年同月比93.9%、価格は1キログラム当たり229円、同106.7%となった(表1)。

表 1 東京都中央卸売市場の動向 (11月速報)

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	115,515	93.9	93.0	229	106.7	99.1	249	228	209
だいこん	10,861	93.6	92.6	74	134.7	99.6	85	75	62
にんじん	7,408	93.4	99.6	121	118.2	90.8	131	124	109
はくさい	13,295	84.2	85.6	63	149.1	114.3	75	60	54
キャベツ類	14,227	92.0	94.4	81	119.9	102.2	91	82	70
ほうれんそう	1,751	95.9	120.9	420	107.5	84.5	524	416	336
ねぎ	5,139	95.3	97.2	268	117.8	88.0	283	263	258
レタス類	6,546	93.3	96.8	194	139.8	93.4	253	191	137
きゅうり	4,622	89.0	94.2	335	112.6	93.3	375	313	306
なす	1,820	93.6	99.9	343	86.2	77.4	332	332	370
トマト	4,245	94.8	88.4	518	101.2	108.0	671	492	412
ピーマン	1,810	88.7	94.7	456	127.9	103.8	473	470	426
さといも	909	84.9	89.2	272	104.7	96.3	288	266	259
ばれいしょ	6,448	108.3	94.9	110	56.6	87.2	109	111	111
たまねぎ	8,921	109.4	93.3	103	60.8	103.0	100	104	106

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注 1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注 2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんが下旬に向け価格を下げ、大幅に安めに推移した前年を3割以上上回り、平年をわずかに下回った（図2）。

葉茎菜類は、はくさいが下旬に向け価格を下げたものの、大幅に安めに推移した前年を5割近く上回り、平年を1割以上上回った（図3）。

果菜類は、ピーマンの価格が、下旬に向け

落ち着きを見せたものの、安めに推移した前年を3割近く上回り、平年をやや上回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が、大幅に高めに推移した前年を4割弱下回り、平年をやや上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

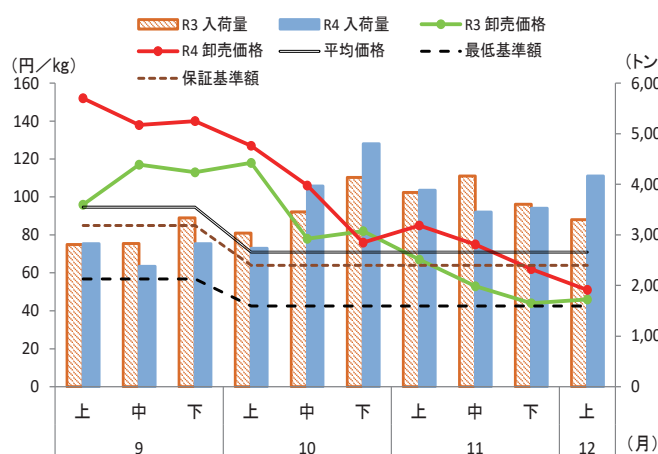


図3 はくさいの入荷量と卸売価格の推移

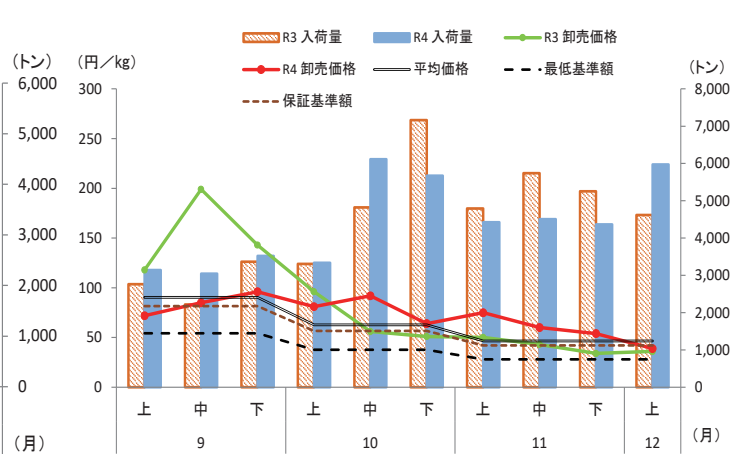


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

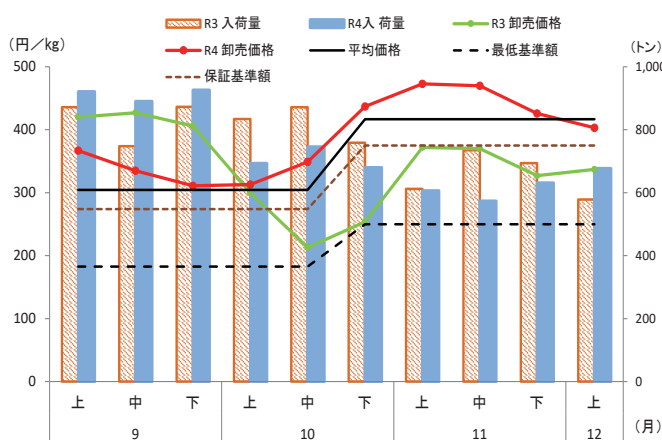
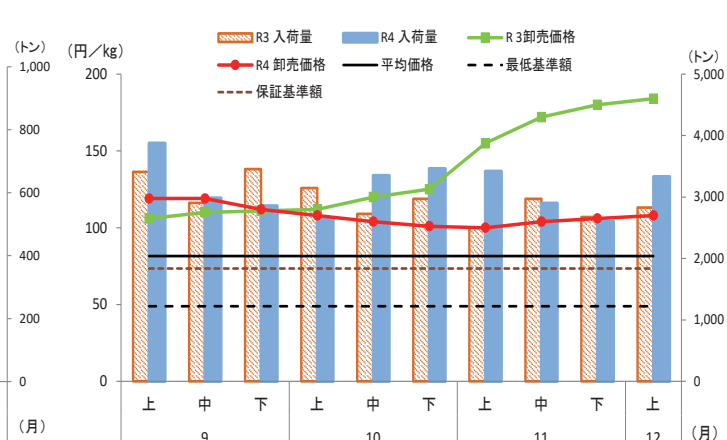


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	千葉産を中心に神奈川県産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、気象災害もなく病虫害の発生も少なく生育は順調。神奈川県産の作付面積は前年をやや下回る。10月以降の降水量が非常に少なく、干ばつ傾向。気温もやや低く、日照も少ないことから生育は停滞気味である。総入荷は前年、平年ともかなりの程度下回った。 下旬に向け価格を下げ、大幅に安めに推移した前年を3割以上上回り、平年をわずかに下回った。
	にんじん 	千葉産中心の入荷となった。北海道産は中旬まででほぼ終了した。作付面積は前年並みで、8月までの大雨の影響で一部の圃場^{ほしやう}で発芽不良や欠株などが散見されたが、生育はおおむね順調。総入荷量はやや多かった前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。 下旬に向け価格を下げ、大幅に安めに推移した前年を2割近く上回り、平年を1割近く下回った。
葉茎菜類	はくさい 	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みから一部減で、生育は順調であったが、10月の低温・干ばつの影響でやや遅延傾向となった。総入荷量は前年、平年とも1割以上下回った。 下旬に向け価格を下げたものの、大幅に安めに推移した前年を5割近く上回り、平年を1割以上上回った。
	キャベツ類 	千葉産を中心に茨城産、愛知産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、一部で湿害が散見されたものの、その後の天候に恵まれて病虫害も少なく生育は順調。茨城産の作付面積は前年並みで、生育は順調。愛知産の作付面積は前年並みで、降水量が少ないため生育はやや遅延。総入荷量はやや多かった前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。 下旬に向けて価格を下げたものの、安めに推移した前年を2割弱上回り、平年をわずかに上回った。
	ほうれんそう 	群馬産、茨城産を中心に関東産の入荷があった。各産地とも作付面積は前年並みで、9月以降の極端な気温の上下による露地作の遅れに加え、後続産地が適度な降雨と気温高であったことから、中旬から下旬に出荷が重なった。総入荷量は非常に多かった前年をやや下回り、平年を2割強上回った。 価格は露地作の増量が多かったことから、上旬までは下がり切らず、中旬以降に下がって、大幅に安めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく下回った。
	ねぎ 	秋田産など東北産の終盤と、茨城産、千葉産など関東産の秋冬作の入荷があった。秋田産の作付面積は前年を上回る。8月の大雨による水害により病害が多発し、残量は少ない。関東産の作付けは前年並みで、定期的な降雨により全体的に作柄は良好。一部害虫の発生が散見されたものの、肥りも良くサイズは2L中心で順調。総入荷量は前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。 価格は大幅に安めに推移した前年を2割近く上回り、平年を1割以上下回った。
	レタス類 	茨城産を中心に長崎産、兵庫産、静岡産、香川産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、病虫害も少なく生育は順調も、雨の影響で一部品質低下が散見された。長崎産の作付けは前年並みで、乾燥の影響で生育はやや遅いが回復傾向。兵庫産の作付面積は前年を下回り、干ばつ傾向で生育はやや遅延していたが回復傾向。静岡産の作付面積は前年をやや下回るも、需要期向けの作付けは前年並みで生育はおおむね順調。香川産の作付けは前年を下回り、10月上旬の降雨とその後の気温の低下で4～5日程度の遅延がみられたが回復傾向。総入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。 価格は大幅に安めに推移した前年を4割弱上回り、平年をかなりの程度下回った。

果菜類	きゅうり 	群馬産、埼玉産など関東産を中心に宮崎産の入荷もあった。群馬産の作付面積は前年並みで、終盤の秋作は樹勢がやや弱い、天候回復に伴い回復。虫害の発生がやや多い。埼玉産の作付面積も前年並みで、生育はおおむね順調。宮崎産の作付面積は前年並みで、天候も安定しており生育は順調。総入荷量はやや多かった前年を1割以上下回り、平年をやや下回った。 価格は安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をかなりの程度下回った。
	なす 	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが、病虫害の発生が例年に比べ多い。総入荷量は多かった前年をかなりの程度下回り、平年並みとなった。 下旬に価格を上げたものの、やや安めに推移した前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。
	トマト 	熊本産を中心に千葉産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、黄化葉巻病など病害の発生が散見される。千葉産の作付面積は前年並みで、一部着果不良、樹勢の低下が見られたが、生育はほぼ平年並みで、一部で病虫害の発生も散見された。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。 価格は高かった上旬から下旬にかけて落ち着きを見せたものの、やや高めに推移した前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。
	ピーマン 	茨城産を中心に宮崎産、高知産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、天候不順や低温の影響で着果にばらつきがみられる。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが病虫害が散見される。総入荷量は多かった前年を1割以上下回り、平年をやや下回った。 価格は下旬に向け落ち着きを見せたものの、安めに推移した前年を3割近く上回り、平年をやや上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月の適度な降雨と天候に恵まれ、生育はおおむね順調。収穫も順調に進んでいる。中国産の輸入は前年を3割近く下回った。総入荷量はやや多かった前年を1割以上下回り、平年を1割強下回った。 価格は安めに推移した前年をやや上回り、平年をやや下回った。
	ばれいしょ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、夏場の豪雨の影響で玉数が多く、小玉傾向でやや歩留まりが悪い。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。 価格は大幅に高めに推移した前年を4割以上下回り、平年を1割以上下回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、夏場の豪雨の影響を受けた地域はあるものの、全体としては作柄良好で肥大も良い。生食用の出荷は前年をやや下回る。中国産の輸入は前年の27.5%となっている。総入荷量は少なかった前年を1割近く上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は大幅に高めに推移した前年を4割弱下回り、平年をやや上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

11月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万8620トン、前年同月比

96.0%、価格は1キログラム当たり216円、同105.9%となった（表3）。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向（11月速報）

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	38,620	96.0	94.9	216	105.9	102.4	234	220	194
だいこん	3,509	91.4	87.2	91	133.8	109.7	98	93	80
にんじん	3,078	104.9	108.5	113	109.7	86.3	114	108	116
はくさい	5,353	83.1	95.2	75	138.9	117.1	88	73	63
キャベツ類	4,232	84.0	92.8	88	120.5	109.4	105	93	69
ほうれんそう	610	98.9	111.0	476	92.6	81.3	603	460	377
ねぎ	1,137	92.4	100.0	368	102.2	85.7	388	367	348
レタス類	1,426	91.2	96.3	192	135.2	93.2	264	184	130
きゅうり	1,001	89.1	103.7	323	115.8	96.6	377	304	288
なす	602	125.6	131.8	351	95.4	83.4	337	356	364
トマト	1,269	112.8	100.5	497	98.8	106.0	653	482	385
ピーマン	482	108.1	102.5	449	123.4	101.8	482	456	409
さといも	209	89.5	81.3	306	101.3	100.3	312	308	297
ばれいしょ	2,694	109.1	92.3	101	50.8	86.6	99	100	103
たまねぎ	4,889	114.5	98.9	110	68.8	112.1	110	111	110

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	月の前半は青森産の残量入荷が中心となり、後半は長崎産、千葉産を中心に、下旬には和歌山産の入荷も始まって主体となった。他に石川産や新潟産などの入荷もあった。各産地とも3L、2L級の太物が中心となり、青森産は残量が多かったため前年を大きく上回り、千葉産の出回りが早く多かった他は、各産地とも入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。全体的な品不足で高値推移となり、月間では前年を大幅に上り、平年をかなりの程度上回った。
	にんじん 	月の前半は北海道産の残量入荷が中心となり、後半は後続の長崎産を中心に鳥取産や千葉産も入荷が始まった。北海道産は切り上がりが高く、中旬以降の入荷量が少なく、月間では前年をかなり下回ったが、長崎産は太物が多く、順調な入荷で回りも早く、月間では前年を大きく上回った。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。 全旬を通じて安定した価格で推移したが、前年が極端な単価安だったこともあり、前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく下回った。

葉茎菜類	はくさい 	茨城産を中心とする入荷であった。長野産は急な冷え込みから上旬には早々に切り上がり、月間の入荷量は前年の半分以下となった。茨城産も上旬は順調であったが干ばつと冷え込みから下旬に落ち込んだ。九州産地や三重産、和歌山産などが月の後半に始まり、下旬には気温上昇から生育が進み、入荷増となった。月間全体では主産地が端境となった影響で前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。 上旬に端境となったことで堅調な価格となったが、後続産地の順調な入荷傾向から旬を追うごとに下落した。しかし月間では上旬の高値の影響から前年、平年とも大幅に上回った。
	キャベツ類 	愛知産を中心として茨城産の残量入荷が多く、上旬は群馬産や長野産の残量入荷もあった。愛知産は、上中旬は干ばつの影響で生育が悪かったが、下旬には降雨もあって回復傾向となり大玉の比率も回復したものの、全旬とも前年を大きく下回った。月間全体でも前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。 品薄感と端境が生じたことで上旬に単価高となり、下旬に入荷増に伴って急落したものの、月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。
	ほうれんそう 	徳島産を中心に福岡産の入荷も主体となり、岐阜産の残量入荷もあった。各産地とも干ばつ傾向から生育が進まず上旬の入荷量が伸び悩んだが、中旬以降は降雨もあり回復傾向となった。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は末端の荷動きが悪く需要が伸びずに厳しい販売が続いた。入荷量が少なかった上旬こそ高値となったが、旬を追うごとに急落を続け、終盤には上旬の半値近くにまで下がった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	長野産が中心となり群馬産や鳥取産も主体となる入荷であった。長野産は作の後半に向かい、旬を追うごとに微減傾向であったが、入荷量は全旬とも多く月間では前年を大幅に上回った。群馬産は旬を追うごとに微増傾向も伸び悩み、鳥取産は順調な入荷を続けた。月間全体では前年をやや下回った。 価格は安定した推移となり、月間では前年並みの価格となった。
	ねぎ（青ねぎ） 	徳島産を中心として香川産や鳥取産、近隣の奈良産や大阪産の入荷もあった。月の前半は気温高が続いたが、朝晩の急な気温低下から生育不足となり、入荷量は伸び悩んだ。細ねぎは高知産を中心に大分産、静岡産の入荷が主体であったが、急な気温低下により生育が悪く、9月の台風の影響が残ったこともあって入荷量は伸び悩んだ。月間全体でも前年をかなり下回った。 特に引合いもなく、入荷量が少ない割に価格は伸び悩み、前年並みで、平年を下回った。
	レタス類 	兵庫産が中心となり、長崎産、徳島産、茨城産の入荷も主体となった。各産地とも急な低温と干ばつの影響から産地出荷量が少なく入荷量は伸び悩んだ。サニーレタス、リーフレタスは福岡産が中心となったが、レタス同様に急な低温と干ばつの影響で前半は入荷量が少なく、下旬に回復傾向となるも伸び悩み、月間でも入荷量は少なかった。レタス類全体でも月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。 不足感から上中旬は高騰が続いたが、下旬には降雨がありやや回復傾向となった。旬を追うごとに価格も落ち着いていったが、月間では前年を大幅に上回った。サニーレタスとリーフレタスも前半は極端に高く、旬を追うごとに下落傾向となるも、月間では高値のまま前年を大きく上回った。レタス類全体でも前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度下回った。

果菜類	きゅうり 	宮崎産を中心に高知産の入荷、大阪産や群馬産の残量入荷もあった。末端の荷動きが悪く需要が伸びなかったため、積極的な展開ができずに入荷量は伸び悩んだ。月間全体でも前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。 価格は資材高騰の影響から単価高となり、安かった前年をかなり大きく上回ったが、荷動きが悪いことから伸び悩んで平年をやや下回った。
	なす 	千両系は高知産を中心として岡山産などの入荷があった。長茄子は福岡産と熊本産が中心となった。各産地とも天候良く日照量が多く、上旬の入荷量は前年を大幅に上回った。中旬以降は急な冷え込みから入荷減となったが、月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。 月の後半に入荷量が減少したことで、旬を追うごとに価格もわずかに上昇傾向となったが、荷動きが悪いことから単価安での推移となった。月間では前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。
	トマト 	秋冬産地の愛知産を中心に熊本産の入荷も始まり、月の前半は夏秋産地の岐阜産の残量入荷も主体となり、千葉産や石川産などの入荷もあった。秋冬産地の出遅れにより上旬は端境となって入荷量が少なく、中旬以降に回復し、下旬には急増した。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。 上旬の品不足感から高値となっていたが、中旬以降の回復に伴い、旬を追うごとに下落、月の終盤には値崩れを起こし急落した。月間では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。
	ピーマン 	高知産と宮崎産が主体となる入荷であった。前年は前進出荷気味で中旬以降の入荷量が多かったが、本年は前月までの遅れから徐々に回復して旬を追うごとに微増傾向となった。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。 価格は入荷増に伴って旬を追うごとにわずかに下落傾向となり、安値だった前年を大幅に上回り、平年をわずかに上回った。
土物類	さといも 	愛媛産を中心に山形産などの入荷もあった。上旬までは気温が高く、需要も少ない中で発注も少なく入荷量は伸び悩んだ。輸入の中国産の入荷もあったが、原油高や円安の影響などによる価格高から発注量が少なく、前年の半分以下の入荷となった。月間全体でも前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 価格は発注が少ないことから旬を追うごとに下落を続けた。輸入の中国産は前年を大幅に上回る価格であったが、月間全体では前年をわずかに上回り、平年並みとなった。
	ばれいしょ 	丸芋は北海道産が中心となる入荷で、下旬には長崎産も始まった。安定した出荷が続き入荷量は前年をやや上回った。メークインも北海道産の安定した順調な入荷が続いた。前年や前々年が少なかった影響もあり、前年をかなりの程度上回ったが、平年をかなりの程度下回った。 前年や前々年の品不足からの高値の反動もあり、販売には苦戦し価格は低迷を続けた。前月までの安値の影響も残り、旬を追うごとにわずかに上昇傾向にはなったが、月間では前年の半値の極端な安値となり、平年をかなり大きく下回った。
	たまねぎ 	北海道産が中心となり、兵庫産の入荷もあった。北海道産は早生品種から中生品種への切り替わりの時期となったが、大玉傾向でL大中心の入荷となった。上中旬は順調な入荷で前年をかなり上回ったが、下旬に落ち込んだ。むき玉ねぎを中心に輸入の中国産や米国産などの入荷もあったが、原油高や円安の影響で中国産の単価が高く発注が少なかったこともあり、前年を大幅に下回った。前年が極端に少なかったこともあり月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに下回った。 価格は極端な単価高だった前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく上回った。

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした1月の見通し

12月になって寒波が入ってきたが、秋冬物は現状も前進傾向で豊作である。市場でのだぶつきから、年明けは物が無くなるかとの心配もあるが、^{ほしゅう}圃場には出荷を控えた野菜があるため、しばらくの間は急減することは予想されていない。荷動きの悪さの改善のため、生産者側は小売り段階でもっと安く販売して欲しいと願っているが、現在の小売りでは、安売りよりも利益を確保する傾向が強い。業務用の注文はコロナ禍前の60～70%程度と、まだまだ低迷している。市場出荷や直売も含めた生産者の総売上は年々減っており、それだけ肥料や資材など、経費がかかっていると思われる。

1月の見通しについて、関東から北に強い寒波が入っており、これが九州まで及べば、野菜は出回り不足となって価格が上昇に転じると思われる。年末から年明けは平年より安めの展開と予想される。



根菜類

だいこんは、千葉産の現状は11月の気温高と適度の降雨の影響で7～10日の前進となっている。1月の出荷見通しでは、現在肥大し始めており、急な寒さが来ても出荷が減少することはないと予想される。2Lサイズ中心に前年並みの出荷が予想される。神奈川産は11月は上旬に多く出て、中旬に減り、下旬にまとまった雨で再び増えて、12月も例年を上回ると予想される。年明けも順調で例年を上回る出荷と予想される。

にんじんは、千葉産は好天が続いて生育は順調で、現状は平年並みの出荷となっている。年明けも1月5日から平年並みの出荷が予想される。Lサイズ中心で肥大も良好である。



葉茎菜類

キャベツは、愛知産は12月に入り冷え込んできたが、11月の高温で生育は進んだため、1月に入ってもよほどの寒波がない限り、平年並みに出荷できると予想される。千葉産の現状はLサイズ中心で、順調である。1月も引き続き順調で、前年並みの出荷が予想される。神奈川産は11月までは前年を大幅に下回る出荷となった。12月に入り例年並みに追いついて、1月は例年と同様にピークを迎えると予想される。

はくさいは、茨城産は11月までは遅れ気味であったが、12月に入り中生品種となって、水分も充分で肥大は回復傾向にある。年明けは9月定植の晩生物となるが、作業が遅れて根の張りが悪い。1月は再び小ぶりになって深箱（6玉入箱）での出荷が多くなると予想している。

ほうれんそうは、栃木産の現状の出荷物は10月上旬に播種したもので、2週間ほど前進している。まだ降霜もなく、数量が多くなっている。12月に入り本格的に寒くなると、年明けには出荷のペースも落ち着いてくるが、トンネル物になるため大幅な数量減はなく、前年並みの出荷と予想される。寒じめほうれんそうも始まるが、作付けは減っている。群馬産の現状は2週間程度の前進となっている。年内は前進傾向が続くと予想される。1月はやや少なくなるが、例年と同様で前年並みの見込み。

ねぎは、千葉産は年末にピークとなるが、1月も引き続き多い見込みである。ここ2～3年は天候不順で少なかった。台風の影響もなく前年を上回る出荷が予想される。中心サイズはLであるが、2Lも多い。埼玉産の冬ねぎは現状出始めた時期であるが、12月中旬以降ピークになってくると予想される。今後極端な強風や降雪がなければピークは1月いっぱい続き、1月としては前年をやや上回ると予想している。茨城産の秋冬ねぎは過去2年不作であったが、年末から1月は前年より大幅に上回る出荷と予想される。年間を通して

は初夏ねぎほど多くないが、年内から年明けも潤沢に出荷できると予想される。中心サイズはLで、窒素肥料を抑えた影響である。

レタスは、兵庫産の現状は前進出荷が続いており、12月10日頃まではこのペースが続くと予想している。温暖で推移すれば1月以降も全体が前進して問題ないが、寒波が続くと年末か年始頃に谷間ができると予想している。いずれにしても高品質物の出荷が続くと予想される。静岡産の天候は適度な降雨もあり順調で、平年並みの出荷で12月がピークと予想される。年明けは厳寒期で例年と同様に減り、現状では平年並みの出荷と予想している。1月は前年を上回る出荷が予想される。香川産の1月も例年並みと予想されるが、全体が前進傾向である。強い寒波が来ると減少が予想される。作付けは前年と同様である。長崎産の現状は前倒し気味の出荷で前年を上回っている。12月に入りややペースは落ち、1月は良くて平年並みだが、後の物が追いつかなければ谷間の時期があると予想される。現状も春物の播種が続くが、全体の作付面積は前年並みである。

果菜類



きゅうりは、千葉産の冬春物の生育は順調で病気の発生もなく、A品の発生が多くなっている。年末から年明けにかけて増加し、1月は前年並みを予想している。施設の加温のタイミングのずれにより、場合によっては前年を下回ることも予想される。群馬産は年明けも例年と変わらず、1月20日頃に出揃い、2月上旬に当面のピークを迎えると予想される。作付けも作型も例年と変わらない。高知産は11月～翌6月までは冬春物となるが、現状は悪天候の後で出荷は減少している。回復するのは12月上旬後半と予想される。1月は厳寒期であるが、施設を充分加温することにより例年並みの出荷と予想している。生産者が5%、面積は3%ほど減少すると見込まれ、その分出荷は前年を下回ると予想される。

なすは、高知産の現状は日照量が多く生育順調である。むしろ天気良すぎて害虫の発

生が多かった。一旦ピークは過ぎて12月上旬まで少なめで、中旬から1月にかけて徐々に増えて、1月は12月の1.5倍程度の増加と予想される。福岡産の現状は前年並みの出荷であるが、平年よりも多い。前倒し気味であるが、厳寒時期となり年末に向けて減少が予想される。年明けは横ばいで推移し、年間で最も少なくなると予想される。樹勢に問題なく、1月としては前年を若干上回る出荷と予想している。

トマトは、愛知産の現状はやや少なめの出荷となっているが、年内は回復しながら推移すると予想される。年末から急増し、1月には前年並みに一定の落ち着いたペースでの出荷が予想される。L・M・Sの比率は、それぞれ3割ずつ程度とサイズに偏りが無い。福岡産は生育順調で、着色が早まるなど豊作年である。12月に入って気温が下がり、例年並みに落ち着くと予想される。1月についても問題ないが、中玉トマトの栽培に切り替えた生産者がいるため前年をやや下回るが、「フルティカ」(250グラムパック)は前年を上回ると予想される。熊本産は年末に向けて増加傾向で、1月も前年並みに多い見込みである。現状1月に出荷される木(6段目)には実がしっかり付いている。黄化葉巻病は前年のように多くなく、Lサイズ中心の見込みである。

ピーマンは、茨城産の現状は抑制物の終盤を迎えており、少なめの出荷となっている。12月からは温室ピーマンのみとなるため年間を通して少ない時期を迎える。生育は特別悪いわけではないが、花落ちの部分もあるなど、多くない数量での一定の出荷が予想される。作付けの減少もあり前年を下回る出荷と予想される。高知産は台風が近くを通った影響もあり、スタートが遅れた。そのため現状は少なめの出荷となっている。1月は長期予報で厳しい寒さが予想されること、また前年が多かったことから引き続き少なめの出荷が予想される。作付けは前年並み、中心品種は「みおぎ」である。宮崎産は台風の影響で、県内産地によっては11月は少なかった。12月に入り寒波の影響で少なくなっており、再び増えるのは1月中旬からと予想される。2月は再び減少し、3～4月に本格的なピーク迎える

といった流れが予想される。



土物類

さといもは、埼玉産は現在も収穫は続いているが、令和4年産は、数年に1度と言われるレベルの豊作年となった前年に近い豊作であった。1月からは貯蔵物となるが、前年並みか若干下回る程度と予想される。

ばれいしょは、北海道産の「男爵」の入荷量が、大幅に不作だった前年の127%となっており、作柄は平年並みである。4月中旬まで計画的に出荷していくが、1月は前年を上回る出荷が予想される。「きたあかり」は例年並みの収量と大きさであり、貯蔵品を4月まで出荷していく。

たまねぎは、北海道産の令和4年産の収量は、干ばつの影響で少なかった前年を上回った。収穫時期の雨が多く、農家によっては歩留まりが低下しているケースもあるが、12月～翌1月も前年を上回ると予想している。Lサイズ中心に4月まで計画的に販売していく。静岡産の「ホホワイト」「黄色」は例年と同様に初月から始まる。生育順調で、寒さの影響はない。「ホホワイト」のピークは1月下旬～2月いっぱい、「黄色」は2月で、出荷は3月いっぱいを目途にしている。作付けは前年並みで、1月に降雪があると少なくなる可能性もある。



その他

ブロッコリーは、香川産の生育は順調で、現状は2週間程度前進している。寒波が厳しくなると年内は少なくなると予想される。中心サイズは20玉（Lサイズ）で、肥大良好である。愛知産の現状は寒さが本格化して少なくなっているが、12月中～下旬には増えて充実した物が出荷されると予想される。定植時の雨が多かった影響で、年明けはやや前年を下回ると予想している。群馬産の生育は順調で、前進傾向で現状ピークとなっている。このまま全体が前進して年末年始も減ることな

く出荷できると予想している。量的に多いのは1月の後半までで、その後減ってくると予想される。作付けは減少傾向で、ここ数年の単価の伸び悩みが影響している。

カリフラワーは、福岡産の秋冬物のピークは1～2月で、年内は増えながら推移すると予想される。現状は生育順調で、1月は平年並みの出荷を予想している。作付けはほぼ前年並みである。

セルリー（セロリ）は、静岡産の現状は生育順調で、例年を上回る出荷となっている。この状況は1月まで続き、2月に入って少なくなると予想される。作付けは生産者の高齢化により前年の90%と減っており、その影響で12月～翌1月は前年を若干下回る可能性もある。

かぼちゃは、沖縄産の県内出荷は12月から始まるが、県外出荷は年初から。「えびす」を中心に2～3月と産地リレーしながら出荷していく。現状生育は順調で、作付けは前年並みである。

かんしょは、千葉産の令和4年産は豊作気味であり、年明けも前年を上回る出荷が予想される。品種は「ベニアズマ」「シルクスweet」中心であるが、「ベにはるか」が徐々に増える」と予想される。

れんこんは、茨城産の現状は潤沢ペースで出荷が進んでいる。前年が極端に不作であったが、一昨年と同程度の出荷となっている。年明けは年末より少ないが、平年並みの出荷が予想される。

ごぼうは、青森産は12月に入り降雪して年明けは貯蔵物になるが、大幅な不作で前年を下回る出荷と予想される。品質も例年ほどでない。九州産の新ごぼうは予想より多くなく、台風の影響がある程度出ていると予想される。

豆野菜は、鹿児島産の「スナッペンどう」が10月下旬から始まり、生育順調で12月と同じ程度で横ばいで推移すると予想される。「そらまめ」は11月下旬から始まり、平年並みのペースである。露地物で12月から本格化し、1月に出荷が出揃い、最大のピークは3月で、作付けは前年並みである。「グリーンピース」は10月上旬から徐々に増えてくるが、例年通りの推移と予想される。1月は12月よりもや

や増えるが、ほぼ横ばいで推移すると予想される。作付けは前年並みである。

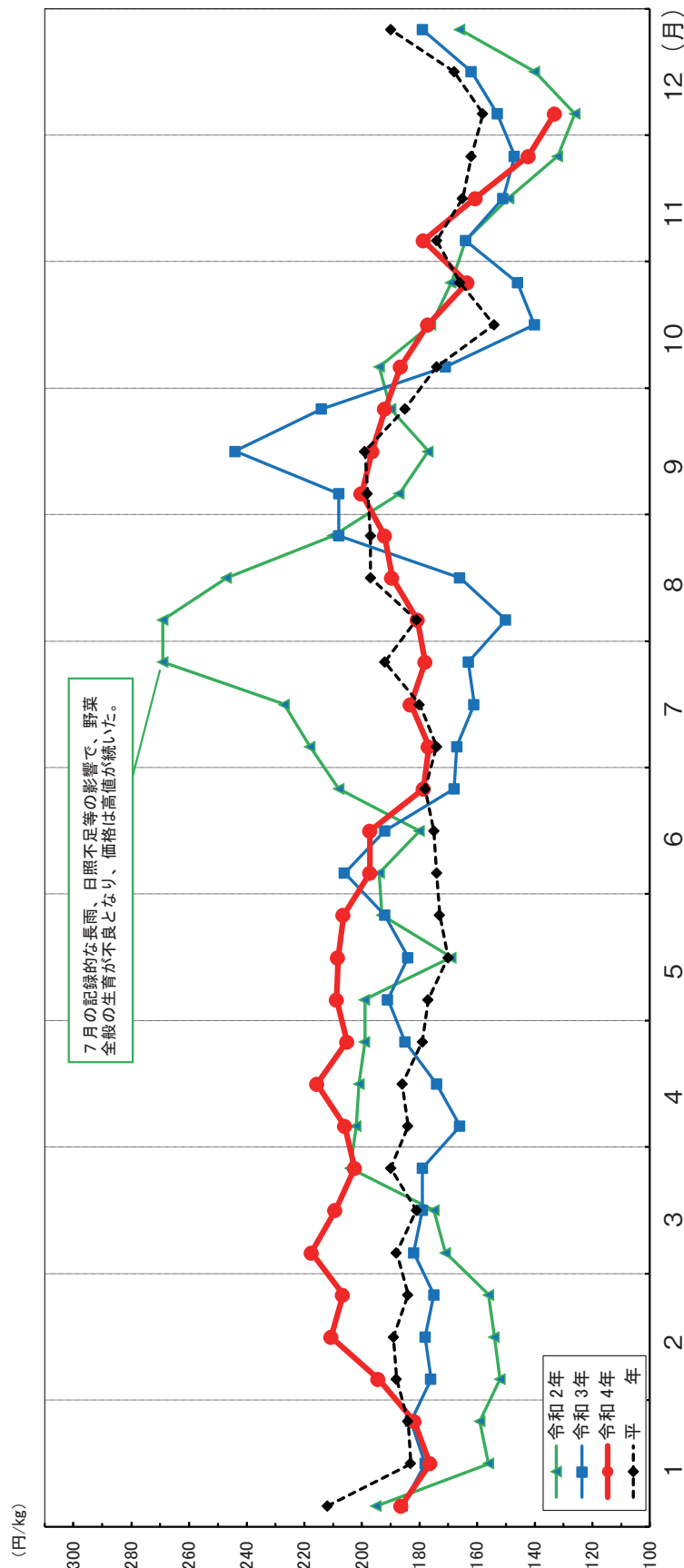
菜の花は、千葉産は発芽不良の時期もあったが、暖冬傾向もあり生育順調で前年を上回っている。12月～翌1月の出荷も寒波の影響で少なかった前年を上回ると予想される。結束タイプが中心である。

山菜は、山形産の「たらの芽」は1月中下旬から始まると予想される。「うるい」は1月下旬から。市況が安かった影響で栽培農家が減っているため、量的には前年を下回ると予想される。

（執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

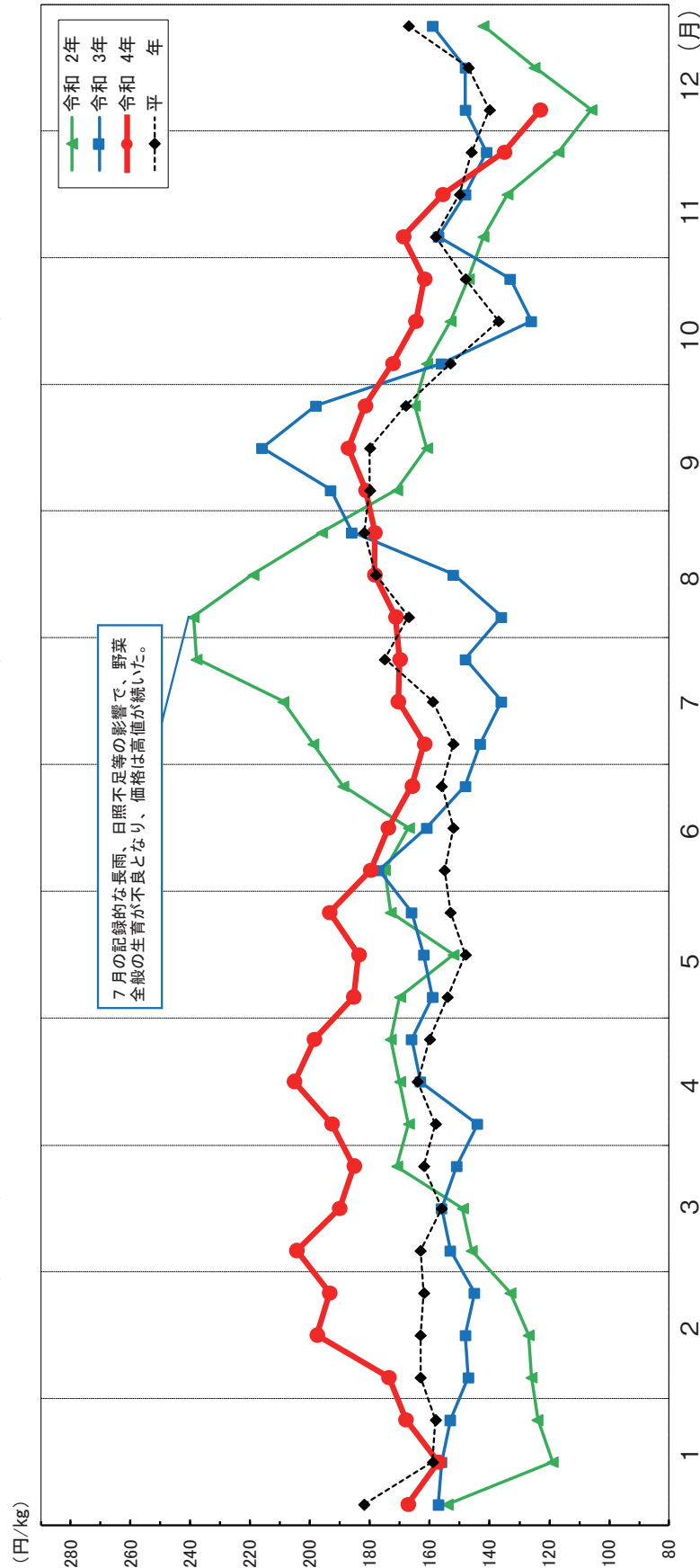
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和2年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179	
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133		
平	212	183	184	188	189	184	188	181	190	184	186	179	177	170	173	174	175	178	174	180	192	181	197	197	198	199	185	174	154	166	174	165	162	158	168	190

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和2年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	170	152	173	175	167	189	199	209	238	239	219	196	171	161	165	161	153	147	142	134	117	106	125	142
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123		
平 年	182	159	158	163	163	162	163	156	162	158	164	160	154	148	153	155	152	156	152	159	175	167	178	182	180	180	168	153	137	148	158	150	146	140	147	167

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。